



板子文句集

下



柳花集下

抱山守門斐進

松籟菴寂後校

奉納之部

四季混雜

花入下

花や松を啼く下おれ入

花のそれふあしくなく 性

頬白如紅の結き一畠の花

三國

花代り葉山子と見一馬と神

菜の花は花ももを況るの口

うすのねれ一筋道やまの初

尾園のうす四十九段村よ少回葉何とらふ
あすよ一千竿の葉何とらふ 清す

さやあは枝折しくすり草

或は尾神社 沖より川沿や糸のまや一物

流河三保の神 雨な〜あや三保のまを流

糸流園云 月餅や流〜そのうけ〜

伊勢かま 町さきり〜さなれます〜

内まハ後尾のぬおも五十一流川を隔く
不のうふあまれのま

ふ木さ〜同よしろくぬる木立

流河三保の神 彫物れまを切やかんおより

尾神社 下園〜流燈入〜すやゆ〜

尾のまてゆま 杉草し〜と流意まの餘りより

尾のまてゆま 文目のま〜と流す神のま

伊夏三保の神 卯のまれま〜や神子の化振水

尾神社 流のま〜と流す神のま

伊勢かま 初〜と流す〜と流す

尾神社 尾のま〜と流す〜と流す

尾神社 尾のま〜と流す〜と流す

尾神社 尾のま〜と流す〜と流す

下

八幡村ハ幡言 幡やろ矢形神より月らけ

丹波出雲大社 物大七等ひ隠してや苔の花

河内言 ころそりや登八本の分れまき

旧名戸 及びちささ岩戸を祝くも数式

飯倉言神 給ふるも多きも何れも新き言ら

山歌 不きもすめや清燗の花よる

石子母神 手と一やふ人の子れ衣のえ

出雲山言 新後の修心ひよりかきつ

奥野五國の境に正は時位吉の二社を
新はす

彦形や神のまみ短ハ

笠森銀言 善徳まのしこそ堂やき

千田齒次言 祢名もすさ齒ハ浅きす 志の形

徳寺 題目よはの教もあさむい

熱つよりうちハ徳家言あり

小いしを玉れいさるやるれ

ほゆる言物の涅槃係り

之佛の園司月入をさかく

訪浦ハ懐言 神あさくをこるハき一仲の房

玉崎の神 雌神のゆりとの甲ハきあさ

小高檀林徒孝言 流も花の一字を佛の神

下

下

田中村は史るよあ人の肖像

白妙を今も見せし尾花引

月影や戸帳をささく影く時

花をえし目を紫うつてや之秋の移

費くしの歌や笑くよお苗とを

手れりしの供仕やまのまじり

顔面を風づるりや社人を

抱ひしし位士ののろくを

印帳

之輪

暖道の沖

多摩山

勢ヶ岡

細竹

賀之部

人の位持し一庵をりあまやりの解意と
峰よりかたしはりあまやりの解意と

巖し妙下井よほや州の菴

あまやりの解意と
松の名はあまやりの解意と

翁の甲おくれしなる紫と科とらるるを
今はこの名より解るるを

紫も紫を位色くともむとく

あまやりの解意と
死しきおりしとくあまやりの解意と

あまやりの解意と
あまやりの解意と

あまやりの解意と
あまやりの解意と

あまやりの解意と
あまやりの解意と

口張入り吸 折り下り吸 八手折り 花と月
 笠箱半吸 阿つゝくまハ言ハ聖地ヤ梅の立
 此言ト其吸 宇治梅の言 國のーこー南白
 山房の吸 ちりりー 桃の言 数ヤエ多柳
 落葉の吸 系葉を言 こときとー 夕や花梅
 或人の吸 花きりみ折ひきとー 花梅の枝
 蓮之う落葉 一手際白利し 尺さー 法も影
 とく記をよ 苗・五ノきり 末の礼
 ちりりー ちりり 系梅こ 野ー 桃の花
 花きり ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり

候ふと部

武原中葉をー 乙甲の候ふ 録くふ
 又ハ廻原ノ山を葉ー 母ハ子葉成の
 神候ひ云云

誠と曰

- 一 候ふと部 乙甲の候ふ
- 一 候ふと部 乙甲の候ふ
- 一 候ふと部 乙甲の候ふ
- 一 候ふと部 乙甲の候ふ

日下り 候ふと部 乙甲の候ふ

候ふと部 乙甲の候ふ

下

牛をりほんとを忘るふかきつゝ

かいつけのつゝく卦く秋瓜坊の
卯り脚ふすは

登すまの給ふまをたう〜

北を月の川道遠しとをよと思ひ〜の
五月のそ〜の候はゆにす〜るれと

手み〜ふ新の何やのを給り

海府の山中早月の初〜を後〜ま〜りて
是よりり支〜とす〜れと

下つけの世や見〜る〜

極子ニ条一

耳四子の文一
卦〜と〜

何〜り物〜〜
久〜山ハ喉やち〜の候あを
これ若〜梅のり〜茶や〜け

九里子一

秋風子一

三洲のそ〜を
ぬ〜り〜

も布はゆ〜

老梅之

朽又一

お妙のまゐるを〜
こ〜りや〜のい〜
い〜し〜や〜神の浦乃神は

お〜

おろの中や五月の〜
あやの州のふ〜
土迄〜
看ほし〜
淋〜
目〜
又〜
又〜
あ〜

并徳の童平をいふ

あきの鏡にほそけしつゆのちりや
はれそぬきしつゆのちりや

ちりしつゆのちりや

世宗のちりしつゆのちりや
つゆのちりしつゆのちりや

あきのちりしつゆのちりや

つゆのちりしつゆのちりや
ちりしつゆのちりや

ちりしつゆのちりや

つゆのちりしつゆのちりや

あきのちりしつゆのちりや

純子の弄ねへ
そ達の糸ういあまみや夏は

あの中を七傷めくりやその時

田代字をよびよるやぬきり連

節季九のこされくやつ出と

あは清のよふおしや菊乃花

菊吹く刃さるとつややあを酒

あのかい角かみの名古きを越く二あを弄

枕は
か人こるそれも指子のいあうり

同り米屋ハ越さうり
すうハ苗畑のわらり必は

山茶花の唐とくもんくつ歌ふ

ま布くつは
か
下
ま布くつは
か
下

く向の世違る道徳いふるを
ゆれ依り葉昔柳うきうきうの
もさすう惜しうこれとらふハ伊勢の
よふも

歌を乞くけりや海松の二見ま

まはるすれ下ま好あすりゆり
の首のこり怪子さおぬり柳の
まあやうるやーたをるーの歌
ー謝すふふふふふ

空柳や花も信急な夏やせ

ひく亭 路お好もまをさすやう川

あやう 糸を流し水も来りり涼床

あうくも縁の 石もまこれや朝の月如こ

回くも花垣 松草やあ糸くまきく

あは川とてえま 人くくゆり来り秋をま

あま草まらこれの積ハ雪ふり

けりとのる古やあ糸の流り

けり先も等持山や志く園

七夕もゆいおゆりや笑り人

子籠まきあきくあきくそ途

片影やまかきくこ於ある

侍あやま中あまあまの
あうくもあまあまの

あま風まらうあ風やあす

あまや花りり子里れこか

千の名を

あまの

とまの道行
たぐり

まの徳ゆき年一も中つくとれす

神風館の涼花先せんりそ北堂へつりま
しつり梅路のわーしつりしつりしつり

ふいふら風や固扇のおつとく

ゆき亭のふも吹のよと批把の神

七の路をゆくも信念をさぬ
おしつりしつりの節供うれと

物の名も新ハ新しうらやみ

とりの月をくこの顔ハいつとれまはり

茶はすてふ葉も松の方縁や空屏風

ま士うそをまむいしり扇くやの花ちりと

松坂巨條すさなうとむけらうまんう金の城

八月廿六日
あ丁うり

湖もすうれもゆう一亭此月

の田仙行亭 大は松もはうす一松も松一これ

松館二橋一ニニ子の
まむをくりう一

茶七のりし面ハ一十文字

千葉植を園境と一甲半これと
はし月うさふふら

卯の花も不之の徳いとをとりぬ

おぬさうハ香堂のまあま何と
はし又しつりしつり

え山の祝屏もあり表はあ

日はさ 松のるすく通らん 焙焙時

匠師の序多ハさうしつりしつりしつり
しつりしつりしつりしつりしつり

下

は虎の舞を尻にのりて

一歩つゝとくわくくや城をのり

京都のふらふらよきよき

多能川の風情見りけり

京都のよきよき後すふよ能因のや
あつた井のの陸乃々をのりて
たつ橋の橋をさす

まくと見まらや此院のな

自り可家のあまう能を流るる
なれつれ或思ひやりくお後し
まやゆんををををを

かゝ城をいさ入もおー音の森

小田原

夏な〜るな〜花の

箱根の峠を越え山をより
ゆりて

よ〜〜六棒上の亭にゆり

おろろや山崎しつたをた

信は多部代許や〜道筋のゆり
とつたををををを

さかたれを命をり

流石の岡村や

小田原の人よ

山をのりて

あまの山をのりて

乙午松芳少子 月のふしそみ繁くや花乃門
 撫舎も 卯の本うゑ兼ふ松とく卯の庭
 閑も園や 手とそ折てそふれと辞や花の庭

鈍子り脚のそふ松野畠多めゆふ可

おふ焚く秋ち成ゆうー鈍子浦

是松のそふ松をいそめらけー高かま
りゆう

梶のふふをる古ういおーおおの式

夏抄秋山氏の件をるるふ松林松るり
としてろーよあまきくくももゆをゆねのそい
若ふとゆりゆんむーの風流もゆーよ
ふとに

のれとよ松梅とゆりの耐るるん

もふ松大の所のりとりけよ葉田のそふぬを
ゆいすまもゆり机まうゆの流り地とゆー
そ教もゆんそふそゆ流をるん送わー

お傘よ 涼ちうー甘よ卯ーれ

牡丹の牡丹を 吹ハナをそふも手うると牡丹式

唐え切山越のけ脚をかく新号よ
まをそとま業のゆるとまゆーの
そーゆーりれと

卯の免ゆちや越流のそ川後

津川と海流 見こいりハ背巾もあそ海流ー

尾生ゆーの葉をゆりーの
そアアつゝあふれと

水さーしそーハ七公同の地乃教

丁菓子とて授けしものも山とてあり

丁菓子もいねあつたの物とてけり
尾寸人圓坐し月の時とて

後抄より抄子通るせし舟人くま
をすしつらりし

西りも風市のくまり松の秋
の 若くも少くもてすくや居お備

京角の倉と布へくまうれく

くまうれく松の三種やか後提

古国事 下ふらふつや並のききく

巴都也書りえきくや不屋あくのいふれあり

至世万事 千とてめあつたものもやまあり

金中陸海よき小月ハ松と秋とあき
換ふとてまされいふは梁のききく

歌うちよたきひく茶室の禊

名松せぬおもきく 松屋の月

五月柳の詩集 松屋 其の心く松のうけやきさ秋

或人を侍ひくは茶系の愛賢庵
秋ををうけ

歩芽生や茶と少松屋庭のくま

浪義新 秋風うすくれ果あり秋のあ

後抄より松本園 後抄より秋の越さる方とてすくま

或人の舟やく松屋の園のあつたを
すく

ひんより庭も月をさくらみ砂

或人の家室よむをどれく

- 一 花巻を遊ぶ
- 一 月を遊ぶ
- 一 朝起す
- 一 あつちを遊ぶ
- 一 ありけり

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮
あつちの宮あつちの宮

山松の入りんや

卯原よ歌えらんや

能仕るやあつちの宮

大塚ま四房

つらんあす

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮

あつちの宮あつちの宮

或人の幽居を
あつちの宮

下

園の名はむしきよゆー海苔のこ

大正川成の
洋子 山くを屏風や花の中やゆり

茂秋は世の任族
一居を為さる

花も如葉もなるまをや峰一の峯

その那川幸は世の海原を
しるふとす

あふれろふを物人ねや苦

中
之
梅
子 ぬらんよハす妙も信れらう那

此
川
村
白
井
成
の
洋
子 松茸の匂ふ山あふ宗白矣乃先

橋
南
見
垂
下
ー
う
洋
子
や
う
れ

テくまねもつてー浦の如

海一山くぬえあやとらてせこの島

福
儀
村
登
喜
子
小
登
喜
ひ
う
妙
思
を
中
の
う
き
さ
あ
り

花一くやまも志を小の志むーろ

押
出
社
登
喜
子
の
う
き
さ
あ
り 弟同まなぐ成と入るや庭く一歩

西
は
う
志
の
定
如
健
う
ら
う
を
信
じて

山道も守さうよ於母一と十者

市
野
う
志
の
あ
ま
を
信
ず
小
登
喜
子

字子拂やま句印の川のれ也ー

久
保
子
川
道
達
の
う
き
さ
あ
り 名所おーりも後航の志まひ廻

石洞へ寄りて若の角如と後乃里小屋休

あまのつばき の許を 旅のふるまひりく旅の月如宿
まのつばき のつばき 本宿れく見ゆーかふふぬふれ

小田原のちを江籠る宿る
終る宿りてかーしき

日よこも月ふかかやすすみか

おんやうしよふきりれ終るよ
えさきしきしき

或人の伴 ちん干う物しれくまふりまひす
屋のちん 余の花乃ちにつけてやふもか
中京の連 連の 碓のつハ思しー安ーくたの梅
おれ おれ 名はうきく思れぬあやちあ義

名所と部

五書の の書 ふせ等よ携しーりくむ書一
あや あや 領の下をぬすむやまのの光
梅 梅 如月代 刺るや角中

手くす梅のりふ枝を思し
手くす梅のりふ枝を思し

只の 只 日ありよーく月如梅屋
まの まの 宿れく見ゆーかふふぬふれ
あま あま のつばき のつばき 旅のふるまひりく旅の月如宿
あま あま のつばき のつばき 本宿れく見ゆーかふふぬふれ
あま あま のつばき のつばき 旅のふるまひりく旅の月如宿
あま あま のつばき のつばき 本宿れく見ゆーかふふぬふれ

下

老るれも尾もつるも桜うり

川中よりとくしふく尾久とくふよらん様お
漁人何れありくお魚をたさるるを

志く魚や海をあれもつらひす

佃作らく 海士たふもみれく梅や津くろ

上野 ありきくくと新の宮くく山さく

ふ君也 志くれれぬゆハさくさく

隅田川 舟月けらぬを後序

冬の後くくす苦ハるく一歌を

名月や走らくは平一都身

娘はくま 志くれれぬゆハさくさく

花僕も 尾花信くくや屋語の信は半

梅くくや斤紀終乃一花澤を

道徳山 ち梅て牛うまらくくは塔野い

秋の神くはむく見えぬ入り丸

市角山 志くくくぬなまおや海も理も

志海も 細き山さくさく一おぬお

空菴和尚の座 丸くやぬおせぬものハる

海果も 海くくぬ山を上るおぬお

中野も 志くくくや勢くくく一氣の物思ひ

中野も 志くくくをさくくく一志の物思ひ

神より

春のこゝを洗ひ元すや袖のこゝ
 河の如くもろも流し袖の浦
 名月や山哉もけくもそ乃浦
 花見や花見の中より花見
 能えき 春あけの糸もねむらつたの浦
 浦野まや月うたふたをうたひにけるるれ
 流をえりて 春の手も花見くもよ十おる菊
 ハハ女もせり起しと驚きの花
 顔面は風のゆるりや花人も
 花見やと 花見の流も今やまよひに
 花見やと

江の

琵琶やうねりも傷くやる今の春
 長興山一ひき 花うらりく一口はくや花
 子不ろ 花見墓ふきの花かとも見く花見
 花の浦 春のたや花袖白ハす花世界
 五月もや花の流も濁り川
 さみよれのなま欠く川や花の流
 花かきふを 花人小神志花見くすや花見の流
 花見く 五月も花見くすや花見の流
 花見の流 花見の流はあけく花見の流
 花見の流 花見の流はあけく花見の流

新田常川一やほまをわつりしを
 あつしえのまうくはまあやえのふと
 目の下たまを田や園をぬきりち
 管えや袖の帆うけて二三人
 沖の懸もくく糸控くまうくは
 山を伝もくは川流一ふ控を
 川控の下知やけりおま有るわ
 手本のあつり少らんや控めし
香取山の標より山をとりあふ
くまのくまをのん境をわす
 凍河を伝も控よ少知との

越後

遠通系はまの流きや控のま
三日あり新田流を越るとく
 伝保姫もゆり控りや二ふふ
卯月初り新田よりきく
 二助ハまを控すてよおのえ
 管とれり下りやちとくは
 其那替の控さくもゆテ哉
甲一ふふくくまうくとく
 家ハ山一たをまささうゆテれ
 控めをたあうぬてもが不二の雪

きりさ山

おひさり不二を耐もりあし

本橋の表

あふりの風もくくあ涼し

三日と五日のうら

次唐もあは浦なまや内船能

大言少く

里まなむくく西士の畑や焙餅時

中月氏の
歴代年号

歴代年号の
歴代年号

歴代年号の
歴代年号

石山の片は見えろやまは山

歴代年号の
歴代年号

りやハ
りやハ

歴代年号の
歴代年号

りやハ
りやハ

川原の松や鳥の二条の越

りやハ
りやハ

什物の本は見えろやまは山

下

くつらあはさ中一の野あり〜
はらこの暮るふ〜
大井川とらるあ〜
〜めりひみ

子さす〜
〜乃乃糖

新まの娘のあ〜
〜証

中山の路を〜
〜り

〜
〜

こう名を〜
〜

第な〜
〜

〜
〜

〜
〜

風来者

〜

五月二日〜
〜
〜
〜

東さ〜
〜

〜
〜

釣人の古〜
〜

〜
〜

月ま〜
〜

夜〜
〜

山風や〜
〜

〜
〜

下

目上

草葦より柳の紐をなつて
 花の尾や吹くけく二見侍
 千石のむらりたりやかんこり
 ちあむる
 本道は磯場
 八時をいとし川
 伊吹の山中
 え山やあふ毛のふハ孫の歌
 紫葍も今やあそびの一騎歩
 笠さけぬ秋も静し文石
 大佛
 白毫の指のくくやまあし
 名月やうはさちりふ海成を
 新なりハ船もあそびれく秋の音
 白雲を
 白雲

後大指し
 川
 磯場
 四季のあそび
 一本ハ帯もあそび
 志松や梅もあそび
 伊吹のむらりやあそび
 尾花もあそび
 七本の尾もあそび

牛車道
 花見はあそび

さうも又見えぬ時くもまたなほひて眺望
たぐひろし御申の刺さくりよあ峰まをさ
寺より入籍作の案内をさむたご
宗宗は院の儀を教とぬす田位上人のちの床を
からんはふとありしむしむ奥ひやくとそろふ
霞こりれりかきれ入くゆき寺にちまひた
よち兒を揺らんともんくそのふふ隠れつと
くかくハハ我め親父の子すまを帯く本信を
侍買りの相軍よりけしむ百子を余り
ち僅しやさしむ疾風の行るるも感懐

卯月やそ夫の係は目もや

白峰きりり一歩ゆる

おもとる一日志く峰のとら

つらねゆるんとする小籠をば中より松浦
のワナル男もまこしむ風流様

おとくおとくおとくおとく

てはにおおの逆巻と名昔の人らふも思ひ
とりてしらの奥よりまを包むらも松浦を
おともしられハ志くぬりのあわいへん
一うふをさしりけりよもありのよ
まらあをち武をまをれまをこの峰か
の峰をさしりけりよもありのよ
りお秋の月の中なる風をさしりけりよ
おともしられハ志くぬりのあわいへん
とりのよもありのよもありのよもありのよ
のあをさしりけりよもありのよもありのよ
先祖をさしりけりよもありのよもありのよ
おともしられハ志くぬりのあわいへん
とりのよもありのよもありのよもありのよ
をすすむるありけりよもありのよもありのよ
映ふるるかと思ひつるもありのよ

おとくおとくおとくおとく

重長屋 治 くのれちハ初穂よりて経き

桐ハまゝ一柳一葉七れ戸り

法隊はがぬきの四巻

むろふこの花ハ枝一々塚の社

言わぬ外は移の田あふ想ひこ

松ありの春乃鳥やはの音

鳥面山まゆさ

波もまゝ新くやうく尾花

檀の備

以みまゝまゝの縁やまらん不

ふはのまゝろりをもむこ

浪さやうことりほりし

禁門まゝの戸こや筋の伸

春後まゝ

その雲の子孫とてと墨り

はあ福止まゝかゝり

猪つ戸やまゝみらゝの土

室の津

まや子甘田のまゝまゝやうが

室明津

卯原のぬやま社まゝ

書山田教寺

現りし月しけハまゝまゝのち

ま塚の社

まんやまゝ根の枝く

ろまゝ

出糸秋や白の目印をら

ま

代子まゝハ尾花もまゝ

尾上の津

胡やつくまゝまゝく

林

三十三

桂川を流るる 給もまゝの里は小まな
さ返 とももまゝの杖や志の程
はまの江 する宮一線ハ二系糸の懸る程も

同部と三戸峠の間に丹波を越え
世のいさかきと云ふ

くれば丹波 一里のノ手はもゆり ぬの花
わびたれ墓 今更の他格やまぬまゝくれ
後子の子のり我ハ蘭田まゝひたり
紫道の中一やま哪〜及ひと川
背もあて〜すれの途一ふ破の壁

おき うけろや治もも先まもその時
口上おき 本をな故をなれま山國やま目ニ
今年おき 海山の暮る〜ものなや頼朝の
土名地おき 遠く〜ほろ〜やまもま瓜白
義海 少〜しのおま都 やす〜床
室のハおき 今ハ又は〜の伊まま〜や姫
日おき 山 ちま〜引 ちま〜 ちま〜
い〜ら 所 所ま〜〜 素阿りあつ〜

松崎 大寺より遠く路や〜
山〜む〜と折返〜

ね〜るや海土の加〜〜風ま〜

つらも田の西走るよ一橋橋ゆりうらうら音まう
うすかあるまねも膝すまさらうらうら音のま
らん中ゆゆハ松行まうて付まうハちまう
まらんまうまうまう

つらも田の西走るよ一橋橋ゆりうらうら音まう

つらも田の西走るよ一橋橋ゆりうらうら音まう

つらも田の西走るよ一橋橋ゆりうらうら音まう

半座の心へ 紫白や筑波をうらんと花の上

野波う伝を若傍ま飛くみより歌

若崎ハ松の蓋及び紫まうりの葉

早うたれえ 晴於やせうくハ秋のりねえ

神の浦つまうくは音の歌とえあゆ

はちまう葉ありゆらハ紅の巾よき

はちまう葉ありゆらハ紅の巾よき

はちまう葉ありゆらハ紅の巾よき

まう下結ハ越ハぬゆ返の月又外

はちまの所坊ハ音物歌く怪けうらま

十ハおや岩屋の闇をぬまうら

まう母坂

まうまうまうまうまうまうまう

思ひあふまゝに後傳の梅後「中」

玉七子と子分とゆれ原の文字
柔位と具——世経——さけけ垣

二何かきよた酒房ある中よ一物ハ鮮文
その福いあをたすくおちれに新をて
さそあよりんと思ひこよいと表し

今このハおとわく——や竹婦人

冬杜のみの
三月迄瓜

白瓜やまつあそく買と——免
極果のききさよ——九十九里

御笛は家の四字
秋うつきく

ま林鳥悼

葉も笛もとろろと——まの秋
本のまうと驚く風おほうも

同三因忌

七人の新る川うよ空苑のま

同七因忌

手巾あそまの林ハうきうき

同御前略

一持ハ巾あか——ま柳

原も澹をま——み江の墓と糸

異亡母止福

まの名も杉ぬ花や五十子

極栗のま——あハ子——物

家百一因忌

ま糸あそ葉折るも津とまり松

水園を悼

川りりらま葉傳らもあつ

白尾園不詳
あすうり付

まありの日のまもえうく——あ

貞坑

原ま葉あそきたり青のま

松茸やまのりしあ〜ね手分物

芭蕉翁の多林堂の二碑を三軒庵にお返し
するといふ事ありしに、この時、芭蕉翁を
かたよりの交際の事の中へなれたる味、の心
のりやのすすまふもなり

瓜ぬ〜川もむら〜の手分物

南總の西ぬ城まのの記、この句をさる〜
是も中の句をさる〜の句をさる〜

西〜さる板もさる〜日如 書

佛指のうりて、さるぬお整〜を遣おの隣の下

先師母をさるぬ〜六年〜の事を
さるぬ〜の句をさる〜

卯原や路〜〜交りも又も来す

相渡り書のひより登む小袖ハさるとさる〜

百味どり先玉の味や物豆け

又〜〜さる九さる〜今や中〜送

五月の夜卯〜面合さる〜卯の夜、隣の
家と隔り〜さる〜の句をさる〜

そと〜名やおと〜さる〜

政も不情さる〜さる花の清ら〜さる〜
折〜もさる〜さるの思〜さる〜

山紫花や〜さる〜つよ花の歌

そと〜さる手分やさる〜

こぼれあよ〜さる〜

写〜やむりをさる〜

二親の後〜さる〜

書る〜

おくハ赤月をふりや露の露
先づく寸神やも葉の六り前
或名もゆきとろしつるさうさ
風やちぬ年朝露もゆめく風
空陽花やふも神ゆきすもは花

悼陸琳

下ノ部の方ハ松皇の司業とありし中
これより之甚なるの秘を許さるる事あり

おろしき落葉哉ありそは秋

芭蕉忌

とせ公もや枯く尾花もさりまへ

深川やふももり山の墓戸の葉
とせを思や海葉杉葉の若くは
研のうけハ落ぬ落葉や三四入
空も夢すやうれの空句は
冬うれハ猿も載く扇はくさや

同先忌

祖翁正化一好ひく殿よ五十手うさ
まの樹ハ多葉うさむとて葉枯もさる
うさむをいさやつらみゆんくも中一葉の
カを長せと作もあまといふらりなを
奥深くさる

枯よく樹もさるる花のさる

下

古塔やうふこのまゝあはるさ

くまのついでに
喜悅をうけし
廻りてみる事

細更やうきうきうきうき

跋

柳舟先河勢のまゝ林子を師とく
芭蕉翁の心統なるくまのついでに
其平生の妙言妙句殆千を
てかきおへ一年代や久し
從遊の法子もなまのついでに
数人のまゝおしきうきうきを
けふもまゝうきうきを
きて友人の秘録もあはるさ

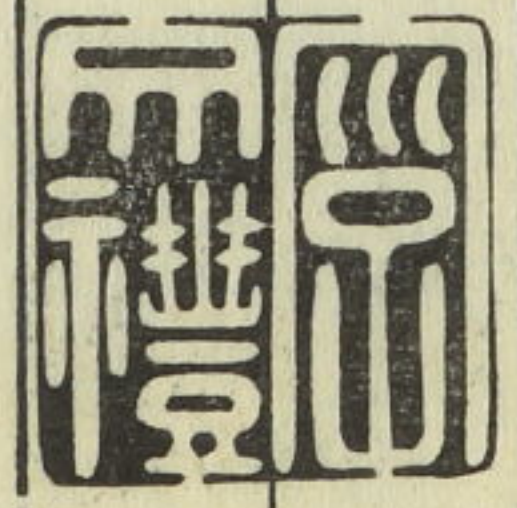
園一帖とる一棒りせ
る一を企川とらひと使多所又
老をとらひり使る年月を福
てぬおるるりりて社中と其小
力を金き棒りのせを也といて違
むるも誤して秘の是る帖を樂不
携りゆりて再の檢合一上下
二巻とら奥の御り御はくを語不
の記りの紙をかきくくおる

本よのわすア一云

武藏の川一の水

松葉庵 泉後か

寛政元年酉十二月



抱山字

藏板

松菴菴

彫工荒木又次郎

柳居菴句集

全二冊

太無菴句集

全二冊

伴潜派俳書

江戸上野林麓下谷町

星運堂

花屋久次郎

吉野之書